

W・B・イエイツと青シャツ隊 ——アイリッシュ・ファシズムをめぐる1930年代

諏訪 友亮

初めに

青いシャツをユニフォームにした組織化された政治運動、通称「青シャツ隊」(“Blueshirts”) ¹ は、アイルランド史のなかでは1930年代のごく短い期間に活動したに過ぎない。しかし、特にその視覚的なインパクトから、アイルランドにおけるファシストと目されることもあり、アイルランド史の様々な面で議論の対象になってきた。また、本論で扱う詩人 W・B・イエイツ (W. B. Yeats, 1865-1939) は、1920年代に登場したイタリア・ファシズムを肯定的に捉え、1930年代には青シャツ隊のために詩を書いていることから分かるように、ヨーロッパにおけるファシズム的な傾向を新しい世界の到来と考えていた節がある。

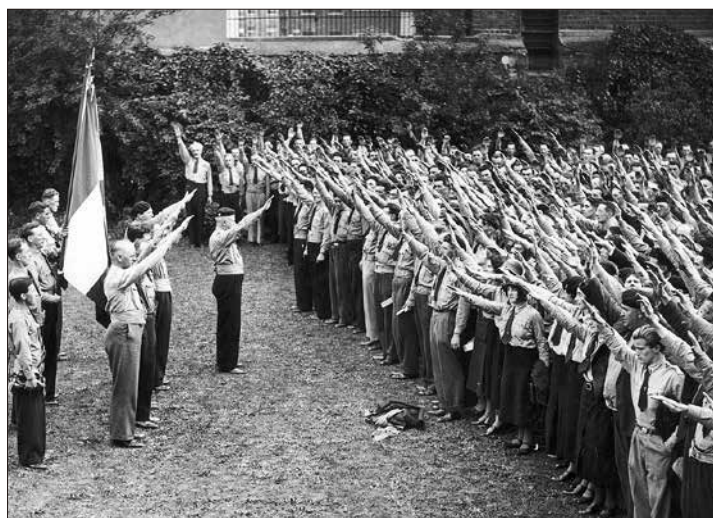
イエイツと青シャツ隊の関係を読み解く研究では、ファシズムや青シャツ隊の存在がイエイツにとって中心的であったのか否か、イエイツがそれらを支持していた発言が信頼できるのか否かに注意が払われてきた。初の本格的なイエイツのファシズム論である Cullingford の議論では、青シャツ隊に対してすぐに愛想を尽かした点が強調され、短期間で彼は “anti-Blueshirt” に転じたとする (Cullingford 212)。Howes の論考においても、1930年代のイエイツにとっては、優生思想である彼の “race philosophy” がむしろ中心的なテーマなのであって、ファシズムは民主化による “degeneration” を止めるものとして期待されはしたものの、やがてイエイツによって批判される、どちらかといえば付随的なものとして見られるに過ぎない (Howes 174-75)。近年の Foster による研究では、より公平にイエイツとファシズムの一致と齟齬が分析され、彼がナチス・ドイツによるユダヤ人排除を目指したライヒ農場法を支持していたなどの事実も発掘されている (Foster, *W. B. Yeats* 628)。しかしながら、Foster も、イエイツ最晩年の作品がファシズムから離れたゆえに、より作品としての魅力があると考えるのであり、“in the poems that reflect most closely his thought about the state of the world . . . the transcendence of supernatural belief inevitably outweighs the attempt to arrive at a political philosophy” とする (Foster, “Fascism” 222)。

イエイツのキャリアを俯瞰的に眺め、一時期のファシズムへの熱狂を晩年の改心によって中和しようとするのではなく、思考の変遷が激しいイエイツだからこそ、時期に応じて彼の文学的・政治的態度を考えてみる必要があるのではないだろうか。そうであるなら、O'Brienによる最初期の批評は改めて注目に値する。彼は、これまで正面から捉えられることのなかったイエイツの政治性とファシズム信奉を組上に載せ、それらがイエイツの思想と一貫性があることを指摘した。そのうえで、青シャツ隊を嘲笑するようになったイエイツが、かつてこの運動に熱狂的だったイエイツより本質的なのではなく、“It was the same Yeats, strongly drawn to Fascism”ということになる (O'Brien 257)。

本稿は、研究が進展してきている青シャツ隊およびファシズムの研究を参考にしつつ、イエイツに見られる近代民主主義への疑義を検討し、彼がファシズムに惹かれた背景の1つに、これまで十分に考えられてこなかったアングロ・アイリッシュ (イギリス系アイルランド人) としての立場、マイノリティーとしての境遇を置くことにより、アイルランドという辺境でイエイツがファシズムへ傾倒したことの意義を再考するものである。

1. 青シャツ隊とアイリッシュ・ファシズム

青シャツ隊は、年代順に組織された4つの団体の通称である。最初の団体 Army Comrades Association が退役軍人の地位向上を目的に非政治的な組織として1932年に結成されると、まもなくファシズム式の敬礼と青いシャツの制服を採用 (Manning 56)、翌年には“*Irish Mussolini*” (McGarry 216) と呼ばれた Eoin O'Duffy を会長に迎え National Guard に改名する。この時期に、彼らは前政権与党の Cumann na nGaedheal、Centre Party と政党 Fine Gael² を結成し、National Guard 自体は当時の政権与党 Fianna Fáil の政府による活動禁止命令を受け、Young Ireland Association へ名称を変更、再度の活動禁止命令後に League of Youth へ団体名を変え、1934年に O'Duffy の辞任と脱退を経て分裂、解散に至った (Cronin 17-18)。



1934年8月18日の青シャツ隊集会 (パブリック・ドメイン)

青シャツ隊が結成された背景には、いくつかの複合的な要因があったと考えられている。1つには、1932年の総選挙によってデ・ヴァレラ（Éamon de Valera）率いる政党 Fianna Fáil が政権を獲得したことだった。デ・ヴァレラおよび Fianna Fáil のメンバーは、独立戦争後のイギリスとの条約によりアイルランドが自治領になる際、北部6県（現在の英領北アイルランド）を除いた独立を認めない条約反対派だった。彼らは条約賛成派と激しく戦ったアイルランド内戦（1922-23）において敗北し下野することになるが、1926年に Fianna Fáil を結党すると1927年の選挙では多くの議席を獲得、1932年には議会で過半数近くを占めるまでになる（Manning 15）。青シャツ隊を構成していた旧政権側（条約賛成派）の人々の間では、新政権が過去の根深い遺恨と復讐心から、公職就任や恩給の受給などの面で旧政権側にいた人間を差別するのではないかという不安が高まっていた（McGarry 202）。実際に旧政権の人々の集まりは、たびたび新政権支持者たちから襲撃を受けており（McGarry 192, 204）、自衛のため独自の民兵組織を必要としていた。

また、青シャツ隊の支持母体が被った経済的ダメージも隊の形成に大きく作用したとされる。青シャツ隊の上層部は旧政権に属した国会議員や軍人らによって構成されていたが、彼らは主に経営者や専門職、大規模農家などの中産階級を代表していた（Manning 5）。デ・ヴァレラの復権により進められた保護貿易と土地の再分配は、輸出で利益を得ていた経営者や大規模農家に痛恨の打撃を与えるものであり、さらに地代³の支払い拒否に端を発したイギリスとの経済戦争（“economic war”）によって両国で関税の掛け合いに発展すると、大規模農家は輸出先の大部分を占めていたイギリス市場から締め出され困窮することになった（Cronin 139; McGarry 202）。新政権は、経済戦争に抗議して政府に地代を納めない畜産農家の牛を差し押さえる強硬手段を取り、各地でそれを妨げる青シャツ隊と暴力的な衝突を繰り返していた（Cronin 149; McGarry 224）。

他にも、青シャツ隊が創設された背景として、共産主義の拡散を止めようとする動きが挙げられる。デ・ヴァレラ政権は、土地の再分配や貧困層へ向けた政策などから共産主義的と見なされることが常態化しており、富裕層を代表しカトリック教会の価値観を屋台骨とする青シャツ隊や旧政権は、デ・ヴァレラたちを共産主義者と呼んで攻撃し、私有財産や神の否定をする共産主義を断固として阻止することを目指していた（McGarry 202）。

これらに加え、青シャツ隊とファシズムとの共通項を探るうえで最も注目すべき背景の1つは、彼らによる議会制民主主義、リベラル民主主義への批判である。前政権の財務相で青シャツ隊の主要な論客の1人、北アイルランドのプロテスタント（長老派）出身の Ernest Blythe は、“Parliament of the old type can no longer do what the public expects”と述べ、政党・議会政治によらない政治機構の創出を訴えている。彼は政党を介さず有権者と政府を“national patriotic organisation”をつうじて階級の区別なく接続することで、“demagogic parliamentarism”を避け、“an organic democratic State adapted to Irish conditions”を作ることができると主張する（Quinn）。こうした組織はすでに大陸の権威主義的政府によって実験されており、そのモデルを緩く模倣しているに過ぎない、と Blythe はファシズムに倣ったことを認めている。

リベラル民主主義に基づいた複数政党制を廃止し協調的組合によって有権者の意見を汲み取ろうとする制度はコーポラティズムと呼ばれ、ムッソリーニのイタリアでは1つの組合しか認めない極端な権威主義的コーポラティズムが1926年に導入されていた。もともとは教皇レオ13世の

回勅 *Rerum Novarum* (1891) のなかで、自由主義と社会主義への代替として中世ギルドをモデルに、階級対立を解消し国家と個人の間に中間組織を置くこと、いわゆる補完性の原理 (“the principle of subsidiarity”) を求めた案が発端とされ、カトリック圏で特に支持を得ていた (Luyten 719-20)。教皇ピウス 11 世が同じくコーポラティズムの特徴を持つ回勅 *Quadragesimo Anno* を 1931 年に発したことにより、コーポラティズムは再びヨーロッパ各国で脚光を浴びていた (Cronin 87)。青シャツ隊のイデオログとされ、大学の研究者でもあった James Hogan と Michael Tierney も Blythe と同様に、議会の役割を縮小する必要とリベラル民主主義の不備を力説しており (Cronin 87-93; McGarry 205-06)、選挙による敗北のために行き詰まっていた旧政権側の人々が発言権を取り戻し、抜本的な政治・経済の変革を可能にすると考えたのが従来の民主主義に変わるコーポラティズムだったのである。

青シャツ隊に関しては、入手できる資料やアーカイブへのアクセスが限られていたため、その視覚的なインパクトのある制服やファシスト式敬礼にもかかわらず、さらにはリーダーの O’Duffy はかつてクーデターを画策するほどだったにもかかわらず (McGarry 189)、アイルランド史のなかで長らく真剣にファシストと捉えられてこなかった。主要な歴史書である Lee の評価でも明らかのように、“The Blueshirts are frequently described as fascists. They were not. . . Blueshirts were simply traditional conservatives, decked out in fashionable but ideologically ill-fitting continental garb” とされ (Lee 181)、Bew の大部の書籍では青シャツ隊に半ページすら割かれていない (Bew 454)。Lyons は Manning による青シャツ隊のモノグラフを引用しつつ、その思想が末端に行き渡らなかった点を強調し (Lyons 528)、Foster においては、青シャツ隊に見る “Irish fascism” の問題は、あまりにも特異なため “an open question” として処理された (Foster, *Modern Ireland* 550)。21 世紀に入ってようやく “It would be a mistake to consider fascism as inherently alien to Irish susceptibilities” と論じられるまでになり、青シャツ隊の政治的失敗の原因は、他のヨーロッパ諸国のように、隊が伝統的保守エリート層と結託することができず、政府に不満をかかえる若年層も惹き付けられなかったこと、農村部でも一部の富農の利益しか代表できていなかったことが挙げられ (Girvin 134)、次第にアイルランド史の重要な一部と見なされるようになってきた。

Manning と Cronin による青シャツ隊の研究書は、そのファシスト的傾向の詳細な分析とは裏腹に、青シャツ隊において “the promise of a new corporate state counted for very little” とし (Manning 226)、Cronin は可能な限りファシズムの本質を定義する試み、いわゆるファシズム研究の “generic fascism” という概念に当てはまるかを見たうえで、“the Blueshirts as a whole undoubtedly fall wide of the mark” と判断し (Cronin 62)、青シャツ隊とファシズムの関係を過小評価している。一方で、青シャツ隊関連の単著において、リーダーである O’Duffy の思想を明るみに出し、“O’Duffy’s core theme—the need for national regeneration through rejection of democracy—was central to all varieties of inter-war fascism” (McGarry 212) と論じられるに至ったのも、やはり 21 世紀に入ってからであり、彼やその周辺人物たちがアイルランドで珍しく反ユダヤ主義に傾いていたことも指摘され (McGarry 319-20)、1940 年代の極右政党 Ailtírí na hAiséirghe の研究も本格的に始まっている (Douglas)。

ファシズムの定義は専門家の間でこれまでにいくつも提出されてきたものの、未だに確定していない。Ernst Nolte による “fascist minimum” (Nolte 537)、Stanley Payne による 3 つの類型論的

ファシズムの記述 (“TYPOLOGICAL DESCRIPITON OF FASCISM”; Payne 7) などがあり、1990年代に Roger Griffin が更新した “generic fascism” においては、ファシズムはごく簡単に “a genus of political ideology whose mythic core in its various permutations is a palingenetic form of populist ultranationalism” の1文で示された (Griffin 26)。しかし、Eatwell が示すように、こうした簡潔なイデオロギーによるファシズムの定義は、静的な概念に陥りやすく、時期によって左派と右派の間を揺れ動いたファシズムのダイナミズムを捉えきれないばかりか、経済政策など多岐にわたる人々への訴求を見逃してしまいかねない (Eatwell, “The Nature of ‘Generic Fascism’: The ‘Fascist Minimum’” 138; “The Nature of ‘Generic Fascism’: Complexity” 67)。ファシズムはあらゆる層を巻き込んだことから見ても分かるように、ご都合主義的で、保守やりべらるとの境界はしばしば曖昧になったこともあった (Eatwell, “The Nature of ‘Generic Fascism’: The ‘Fascist Minimum’” 138)。そのようにファシズムの意味の射程を広げていくなれば、イタリア・ファシズムとナチス・ドイツの同時代にあった青シャツ隊は、制服や敬礼といった視覚文化的側面に加え、議会制民主主義の代替としてコーポラティズムを支持し、敵対勢力への暴力を肯定するなど、ファシズムのスペクトラムに十分当てはまる運動だったといえるだろう。

2. W・B・イエイツ、青シャツ隊、プロテスタント・マイノリティー

ムッソリーニの国家ファシスト党によるクーデター、ローマ進軍が起こったのは、イギリスとの戦争を経てアイルランドが独立した1922年と同じ年のことであり、ファシストによる政権奪取の衝撃は、翌年にナチスのミュンヘン一揆へ連鎖していくように、またたく間にヨーロッパへ広がった。10月のローマ進軍後に送られた手紙で、イエイツは “The Ireland that reacts from the present disorder is turning its eyes towards individualist Italy” と触れ (Yeats, *The Letters* 693)、内戦時の無秩序から回復するために強権的な手段に訴えることに理解を示している。イエイツがムッソリーニにとりわけ好意的に言及しはじめるのは1924年頃であり、比較的初期からヨーロッパのファシズム運動に目を向けていたことが分かる。

イエイツは権威主義の台頭を近代からつづく自由主義的傾向からの転換と見なしており、1920年代前半の時期には積極的な賛意を示していないとはいえ、彼の自由や共産主義に対する従来の懐疑と結びつく形で、この新たな潮流に期待している。

Authoritative government is certainly coming, if for no other reason than that the modern State is so complex that it must find some kind of expert government, a government firm enough, tyrannical enough . . . the centrifugal movement which began with the Encyclopædists and produced the French Revolution, and the democratic views . . . has worked itself out to the end. Now we are at the beginning of a new centripetal movement. (Yeats, “From Democracy to Authority” 433-34)

さらにイエイツは、ムッソリーニに対して2万人ものイタリアの聴衆が “would applaud a politician for talking of the ‘decomposing body of liberty,’ and for declaring that his policy was the antithesis of

democracy”という事態はこれまで考えられなかったとする（434）。後のエーリッヒ・フロムらフランクフルト学派によって診断された自由からの逃走、権威への従属に陥るとされる権威主義的パーソナリティを予期するかのように、イエイツはリベラル民主主義を自ら進んで放棄する時代の到来を見て取っていた。1924年8月に行われたアイルランドの全国スポーツ競技会の晩餐会においても、場の雰囲気壊すようにして、“a great popular leader has said to an applauding multitude, ‘We will trample upon the decomposing body of the Goddess of Liberty’”としてムツソリーニの言葉を引用しており（Foster, *W. B. Yeats* 265）、イエイツにおけるファシズムへの傾倒が単なる一過性のもではなかったことが分かる。1922年から28年まで務めた上院議員の答弁では、イタリアを模範にした教育改革を提言していた（諏訪 24-25）。また、イエイツは、彼以上にムツソリーニとファシズムに心酔してイタリアのラパッコへ移住したアメリカ詩人 Ezra Pound の下を幾度か訪ね、近年では1932～34年にローマで開催されていたファシズム革命展覧会も訪れていた可能性が指摘されている（Arrington 121）。

イエイツと青シャツ隊はほんの数ヶ月程度の協力関係であったものの、そこに至るまでの過程を精査するならば、彼らの共通項は明らかに多い。両者は条約賛成派としてアイルランド自由国の建設に尽力し、ゆえに条約反対派デ・ヴァレラの復権を恐れていた。イエイツは19世紀までの伝統的な階級社会を好み、青シャツ隊は彼が嫌うカトリック教会の強い影響下にあったため、動機は全く異なるものの、ともに反共産主義という点では手を取り合っていた。青シャツ隊には前政権で大臣を務め、イエイツの友人でもあった Desmond FitzGerald や Ernest Blythe なども参加している。そして何より、イエイツと青シャツ隊は、現状の民主主義が不完全であるという認識を共有していた。彼がファシズムに惹かれたのは、“he was increasingly sceptical about the efficacy (and benefits) of democratic government”（Foster, *W. B. Yeats* 468）からなのは間違いない。デ・ヴァレラの政権運営のなかであって、青シャツ隊の話題は、“A Fascist opposition is forming behind the scenes to be ready should some tragic situation develop. I find myself constantly urging the despotic rule of the educated classes as the only end to our troubles. (Let all this sleep in your ear.)”ことを再三にわたってイエイツに思い出させていた（Yeats, *The Letters* 811-12）。

このような文脈のもと、イエイツと青シャツ隊はデ・ヴァレラが政権を取った1933年から34年にかけて最も接近し、彼は隊にいる友人からの依頼を受け、隊の行進に合わせて歌われることを目的としたバラッド“Three Songs to the Same Tune”を書くことになる。バラッドは連を持つ物語形式の詩（歌詞）であり、何世紀にもわたって口承で受け継がれてきた「伝統的バラッド」と、16世紀以降に1枚紙に印刷され都市部で流通した、ジャーナリスティックな内容を伝える「ブロードサイド・バラッド」の2つの流れがある（Dugaw 115）。イエイツは1935年には1年間にわたって文字通り *A Broadside* というバラッド集を出版することから、“Three Songs to the Same Tune”はまさにブロードサイド・バラッドの一部といえるだろう。アイルランドでは、イギリスの支配に対する反乱を物語った政治的なバラッドも数多く見られ、実際、イエイツの“Three Songs to the Same Tune”が合わせることを想定していた曲は、イングランドに破れた16世紀ゲール人の族長 Hugh O’Donnell の勝利（“Abu”）を歌った伝統歌“O’Donnell Abu”だった（Yeats, “Three Songs” [*Spectator*]）。青シャツ隊も敵対する Fianna Fáil も自らの正当性を主張するバラッドの創作

に熱心であり、人々はバラッドの歌唱と音楽の演奏という身体を通して、まさにパフォーマティブに政党政治へ参加していた (Parfitt 106-07)。

“Three Songs to the Same Tune”には、細かい異同を除けば2つのヴァージョンが存在する。1つは、1933年秋頃に完成したと推測され (Foster, *W. B. Yeats* 477)、イギリスの週刊誌 *Spectator* 上で1934年2月に発表された (Yeats, “Three Songs” [*Spectator*]; 以下では初版と呼ぶ)。もう1つのヴァージョンは、イエイツの改作を経て、アメリカの詩誌 *Poetry* (1934年12月号) やその後の詩集に掲載されたものである (Yeats, “Three Songs” [*Poetry*]; 以下では改版と呼ぶ)。また、それぞれにイエイツ自身による解説が付されており、創作と改作の経緯が窺える資料になっている⁴。2つのヴァージョンの比較については、すでに西谷による詳細な分析があり、改変によって、登場する“Grandfather”がイエイツ自身の投影という側面が強まった、政治思想や時代が特定できなくなった、など注目すべき数多くの指摘がなされている (西谷 23)。本論は、“Three Songs to the Same Tune”の歌という性質に焦点を当て、イエイツが求めていたファシズム的政府について考察したい。

初版と改版には決定的な違いがいくつかある。まず、初版では3つのバラッドが「1番」(“First Song”)、「2番」(“Second Song”)、「3番」(“Third Song”)と名付けられ、歌われることが強く意識された作りになっている一方、改版では各パートの“Song”という説明が削られ、イエイツの他の詩と同様にローマ数字によってセクションが区切られるのみであり、文学的な特徴が押し出されている。初版で2番冒頭にあった“Grandfather said in the great Rebellion”は、改版では“Grandfather sang it under the gallows”と書き換えられて1番の冒頭に置かれ、初版にあった「大反乱」に加わる祖父の勇ましさや歴史的意義がなくなり、バラッド全体が絞首台 (“gallows”) でまさに死刑を執行されようとしている祖父の口から出た不吉な歌という体裁を取っている。改版では、初版1番の冒頭にあった“Justify all those . . .”で始まるアイルランドの過去の闘士を称えるリフレインが2番へと移され、このリフレインは初版にはなかった、死にゆく老人が口にするというアイロニーの響きに加わる。さらに、初版の3番で“Some take delight in adoring a woman. / What’s equality?—Muck in the yard”となっていた行が、改版では“Some back a mare thrown from a thoroughbred, / Troy looked on Helen, it died and adored”に変更されている。何の変哲もない女性への愛情と平等への唐突な侮蔑を示す表現は、改版ではヘレンへの愛に溺れたがため滅びたトロイアの戒めへと変わり、その戒めと内省によって聴衆の熱を冷めさせる働きをしている。

改版には他にも歌い手と聴き手を白けさせるような仕組みが用意され、例えば行進曲にとってなくてはならない高揚するリフレインが削られる一方、不気味な語句が新たに繰り返されている。初版1番の“Come march, singing this song / Swinging, swinging along”という、歌い手と聴き手がお互いの掛け声を通して行進へ参加するような行が改版にはなく、以下の全く新しいリフレインが挿入される。

“Drown all the dogs,” said the fierce young woman,

“They killed my goose and a cat.

Drown, drown in the water butt,

Drown all the dogs,” said the fierce young woman. (Yeats, “Three Songs” [*Poetry*] 128)

この箇所着想は先行研究で明らかになっているように、お気に入りの雌鶏が青シャツ隊シンパの隣人の犬に食べられたと勘違いした妻 George が苦情をいったところ、隣人はすぐさま容疑のなかった犬と他の3匹を水に浸けて殺してしまったというエピソードに基づいている (Foster, *W. B. Yeats* 477; Cullingford 209)。青シャツ隊を嫌悪していた George の個人的な挿話を知らずとも、改版は青シャツ隊の揚々とした行進にそぐわないばかりか、犬を躊躇なく殺してしまう暴力の不気味さを漂わせ、没入できない (ノれない) 歌だということが分かるだろう。Foster は、イエイツが “he was determined to introduce private, obscure references in order to destabilize or subvert the public ‘message’” と論じるが (478)、改版ではむしろリフレインの変更によって生じるノリの悪さ、気味の悪さのために、まともには歌えない歌になっているといえる。

この歌えない歌という特徴は、イエイツの意図によるものである。改版の後に掲載された解説において、イエイツは、人々を無知から解き放ち、行進させ導くような政府や政党があれば自分の歌を提供するつもりであったが、青シャツ隊が歌を託せる集団ではなかったと気づき、バラッドの不自然さを意図的に高めるように作り直したとする。

Because a friend belonging to a political party . . . told me that . . . it had . . . some such aim as mine, I wrote these songs. Finding that it neither would nor could, I increased their fantasy, their extravagance, their obscurity, that no party might sing them.” (Yeats, “Three Songs” [*Poetry*] 134; 傍線は論者)

歌い手も聴き手も高揚させず、自滅や過剰な暴力をさらけ出すことで、むしろ内省や不快を思い起こさせるよう語句やリフレインの改変が行われている。Arrington によれば、民衆の言葉を使い、民衆のためのバラッドを装いながら、修辞や内容は高踏的であることは後期イエイツにおいては矛盾せず、“Yeats’s use of idiomatic speech and demotic form in his ballads from the 1930s show how his late modernist poetics are not at odds with his “undemocratic ideals” but spring from authoritarian political values” のである (Arrington 104)。青シャツ隊からの依頼を受け、イエイツは人生で初めて街にいる群衆が理解でき歌える作品を書こうと考え、初版の “Three Songs to the Same Tune” が出来あがったとするが (Yeats, “Three Songs” [*Spectator*])、皮肉にも彼のバラッドは同じ “O’Donnell Abu” に合わせてさらに分かりやすく明快に作られた青シャツ隊「公式」のバラッド (“the official rallying song to the same tune”) に競り負け、行進曲として採用されなかったと、青シャツ隊の機関誌でも発表される事態になっている (“Songs by Yeats”)。改版で歌えなくなったバラッドは、初版の状態でさえ歌いにくかったのである。バラッドが身体を伴った政治的動員を可能にする装置であったことを考えれば、この歌えなさはその身体的動員をくじくものであり、イエイツの考える政府や政党は、このような歌えない歌の意味を理解できる、極めて理知的な集団 “the able and educated” (Yeats, “Three Songs” [*Spectator*]) として構想されている。

青シャツ隊のリーダー O’Duffy は改版が発表される前の 1934 年 11 月に辞任し、青シャツ隊は分裂、ファシズム式の敬礼は廃止された (Parfitt 107)。権威主義に基づいた新しい政府を生みだせると考え、青シャツ隊へ一方的に募らせたイエイツの思いは果たされなかったものの、

イエイツがファシズムと権威主義に熱狂したのは、アイルランド社会における少数派プロテスタントとしての立場とも関係している。リベラル民主主義は、様々なマイノリティーと個人の権利および自由を保障し、彼らの政治参加を可能にする自由主義と、多数派の支配を実現する民主主義という、しばしば相反する2つの要素が結合したものであり、両者は絶えず緊張状態にある (Watson 84)。独立前の1920年にアイルランド全島で4分の1を占めていたプロテスタントの人口は、彼らが多数派の北アイルランドと切り離されたせいもあり、独立後の1926年には南のアイルランド自由国で7.4パーセントにまで減少した (Brown 96)。独立後は多数派のカトリック信徒を中心にする“*Irish-Ireland*”をもとに新国家の建設が行われ、プロテスタント・マイノリティーの排除が一層進んだ。Fanningによれば、“As cultural nationalism became extended within the mass movements of Catholic nationalism, it became used to foster [sic] claims of cultural distinctiveness at the expense of the Protestant minority. . . . This Irish-Ireland nationalism came symbolically to dominate the new state from the 1920s to at least the 1960s” (Fanning 32)。1920年代に施行された書籍や映画の検閲は、自由な創作活動の侵害であり、マイノリティーとしてのイエイツの失望と疎外感を深めた。閣僚に検閲の苦情を入れたところで、結局のところ検閲は大衆に支持されており、“once as a member of the Irish Academy to complain of the illegal suppression of a book . . . with the conviction that the Minister felt exactly as I felt but was helpless: the mob reigned. . . . our men of letters live like outlaws in their own country” (Yeats, “Three Songs” [Poetry] 132)。非カトリックとして、マイノリティーとして、作家として政治に自らの意見が反映されず、選挙がいつも徒労で終わるのであれば、力によって権力を奪取するムッソリーニのような指導者を待望するのも1つの帰結である。“Three Songs to the Same Tune”の最終部は、改作を経てもイエイツの現状を捉えているといい。

Soldiers take pride in saluting their captain,

Where are the captains that govern mankind? (Yeats, “Three Songs” [Poetry] 130)

イエイツのファシズムが、最終的にはカトリック寄りのファシズムであった青シャツ隊と合致せず、大衆的なうねりとは距離のある形で熟成されていた点から見ても、それはPoundらとの個人的なネットワークを介した私的な信念に過ぎなかったようにも思える。しかし、青シャツ隊の一員で、イエイツ以上に青シャツ隊と深く関わっていたErnest Blytheは、北アイルランドのプロテスタントの出身であり、南のアイルランド自由国ではイエイツと同様にマイノリティーとして生活していた。また、イエイツより30歳以上も若い作家でプロテスタント系のFrancis Stuartも、ナチス・ドイツに心酔しドイツへ移住、ナチスを支持するプロパガンダ放送を行っていた。イエイツの詩に頻出する女性で、同じくプロテスタント系のMaud Gonneも、反ユダヤ主義とナチス支持で名高く、第二次世界大戦後も変わらず“compared to Hiroshima and Nagasaki, Hitler’s death-camps were ‘quite small affairs’” (Foster, *W. B. Yeats* 468)と発言している。彼らに共通するのは、プロテスタント・マイノリティーとしてアイルランドでは政治的理想を実現できないという境遇であり、だからこそ自らも参画できると思えるファシズム的政府の待望だったのではないだろうか。

終わりに

たった2年程度の活動期間にもかかわらず、アイルランドの青シャツ隊は、そのファシズム式敬礼や制服の採用といった視覚的なインパクトに加え、コーポラティズムにより議会制民主主義を乗り越えようとしたことから、従来のようなファシストではないという批評は当たらず、少なくとも同時代のファシズムの潮流に含まれる運動だった。

イエイツは青シャツ隊からの依頼を受け、行進のためのバラッドを書いたが、高揚させるリフレインの利いた初版と、行進させない、歌わせないように修正された改版の間には大きな異同が見られる。それはバラッドを革新するモダニズムの実験のうちの1つと見なせるが、だからといってそこからファシズム的政府の希求がなくなったわけではなかった。イエイツやファシズムを支持した彼の周辺の人々は、アイルランドの独立後、急速に人口減少と政治的発言権の喪失を被ったプロテスタント・マイノリティーに属しており、リベラル民主主義の矛盾のなかで自由を制限され、その反動として権威主義的な政府を待望したといえるだろう。

イエイツがファシズムに傾倒したから読む意義がなくなるわけではない。むしろ、イエイツは20世紀前半の世界的混乱を体現しているのであり、彼ほどファシズムや共産主義といった様々なイデオロギーをアイルランドという非常にローカルな文脈で捉えると同時に、循環史観や神秘主義といった射程のなかでも理解しようとした人物は珍しい。その意味において、民主主義がますます不安定化する現在から見ても、イエイツは何かしらの示唆を与えつけてくれる作家なのである。

注

1. “Blueshirts”に現在まで定訳はないが、各国の民兵部隊のモデルになったイタリアの“Camicie Nere”（英訳“Blackshirts”）は一般的に「黒シャツ隊」（『日本大百科全書』、『百科事典マイペディア』ほか）と訳されるため、本稿では「青シャツ隊」と表記する。
2. なお、Fine Gaelは長らくつづいた二大政党制の一翼を担い、2022年時点で連立政権にも加わっている。
3. ここでの「地代」（“land annuities”）とは、アイルランドの小作農が地主に地代を支払うことで自らの農地を所有できるという取り決めを行った、19世紀後半以降の一連の土地法に基づくものである。1922年に独立したアイルランド自由国政府はイギリス政府のために地代の徴収を代行していたが、1932年にデ・ヴァレラ政権はイギリスに対する支払いを拒否する決定をした。区別が必要なのは、下で言及される畜産農家が支払わなかった「地代」であり、これはイギリスの代わりにアイルランド政府に対して払うことになった地代を指す（Manning 21-22; Cronin 137-38）。
4. ただし、改版に付された解説の日付の扱いは注意を要する。時系列的に“Three Songs”は1933年秋頃に完成し、1934年2月に初版が*Spectator*に掲載されているが、1934年12月に*Poetry*

に載った改版の解説は2つに分けられ、それぞれ1934年の4月と8月の日付がつけられている。そもそもこの歌詞は、青シャツ隊の友人の依頼によって書かれたと初版でもイエイツは認めていたが、1934年4月の解説にはそのことが一切触れられず、この詩が4月に完成したかのような印象を与えるように終始している。そう考えれば、この4月の解説は、イエイツが意図的に完成の時期をはぐらかすもの、あるいは（この時期に初めて詩を書いたというイエイツの印象づけに反して）改作の過程を記したものと読むべきだろう。

引用文献

- Arrington, Lauren. *The Poets of Rapallo: How Mussolini's Italy Shaped British, Irish, and U.S. Writers*. Oxford UP, 2021.
- Bew, Paul. *Ireland: The Politics of Enmity 1789–2006*. Oxford UP, 2007.
- Brown, Terence. *Ireland: A Social and Cultural History 1922–2002*. Harper, 2004.
- Cronin, Mike. *The Blueshirts and Irish Politics*. Four Courts Press, 1997.
- Cullingford, Elizabeth. *Yeats, Ireland and Fascism*. Macmillan, 1981.
- Douglas, R. M. *Architects of the Resurrection: Ailtirí na hAiséirghe and the Fascist “New Order” in Ireland*. Manchester UP, 2009.
- Dugaw, D. “Ballad.” *The Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*, 4th ed., Princeton UP, pp. 114–18.
- Eatwell, Roger. “The Nature of ‘Generic Fascism’: Complexity and Reflexive Hybridity.” *Rethinking Fascism and Dictatorship in Europe*, edited by António Costa Pinto and Aristotle Kallis, Palgrave Macmillan, 2014, pp. 67–86.
- . “The Nature of ‘Generic Fascism’: The ‘Fascist Minimum’ and the ‘Fascist Matrix.’” *Comparative Fascist Studies: New Perspectives*, edited by C. Iordachi, Routledge, 2010, pp. 134–62.
- Fanning, Bryan. *Racism and Social Change in the Republic of Ireland*. Manchester UP, 2002.
- Foster, R. F. “Fascism.” *W. B. Yeats in Context*, edited by David Holdeman and Ben Levitas, Cambridge UP, 2010, pp. 213–26.
- . *Modern Ireland, 1600–1972*. Penguin Books, 1989.
- . *W.B. Yeats: A Life: The Arch-Poet 1915–1939*, vol. 2, Oxford UP, 2003.
- Girvin, Brian. “Republicanisation of Irish Society, 1932–48.” *A New History of Ireland*, edited by F. J. Byrne, W. E. Vaughan, Art Cosgrove, J. R. Hill, Daibhi O Croinin, Oxford UP, 2003.
- Griffin, Roger. *The Nature of Fascism*. Pinter, 1991.
- Howes, Marjorie. *Yeats's Nations: Gender, Class, and Irishness*. Cambridge UP, 1996.
- Lee, Joseph J. *Ireland, 1912–1985: Politics and Society*. Cambridge UP, 1989.
- Luyten, Kirk. “Corporatism.” *Europe Since 1914 Encyclopedia of the Age of War and Reconstruction*, edited by John Merriman, vol. 2, Charles Scribner's Sons, 2006, pp. 719–23.
- Lyons, F. S. L. *Ireland Since the Famine*. Fontana, 1973.

- Manning, Maurice. *The Blueshirts*. 3rd ed., Gill & Macmillan, 2006.
- McGarry, Fearghal. *Eoin O'Duffy*. Oxford UP, 2007.
- Nolte, Ernst. *Three Faces of Fascism*. Translated by Leila Vennewitz, Mentor Books, 1969.
- O'Brien, Conor Cruise. "Passion and Cunning: An Essay on the Politics of W. B. Yeats." In *Excited Reverie*, edited by A. Norman Jeffares and K. G. W. Cross, Palgrave Macmillan, 1965, pp. 207–78.
- Parfitt, Richard. *Musical Culture and the Spirit of Irish Nationalism, 1848–1972*. Routledge, 2020.
- Payne, Stanley G. *Fascism: Comparison and Definition*. The U of Wisconsin P, 1980.
- Quinn, M. G. [Ernest Blythe]. "New Type of State Needed." *The United Irishman*, vol. 1, no. 47, April 15, 1933, p. 5. <https://www.irishnewsarchive.com/>
- "Songs by Yeats." *United Ireland*, vol. 1, no. 25, March 3, 1934, p. 1. <https://www.irishnewsarchive.com/>
- Watson, Bradley C. S. "Liberal Democracy." *Governments of the World: A Global Guide to Citizens' Rights and Responsibilities*, edited by Bradley C. S. Watson, Macmillan Reference USA, 2006.
- Yeats, William Butler. "From Democracy to Authority." *Uncollected Prose*, edited by John P. Frayne, vol. 2, Macmillan, 1975, pp. 433–36.
- . *The Letters of W. B. Yeats*. Edited by Allan Wade, Hart-Davis, 1954.
- . "Three Songs to The Same Tune." *Poetry*, vol. 45, no. 3, 1934, pp. 127–34. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/20579736>
- . "Three Songs to the Same Tune." *Spectator*, Feb. 23, 1934, p. 20. <http://archive.spectator.co.uk/>
- 諏訪 友亮「カウンター・アイルランド —W・B・イエイツと自由国の教育」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第57集、2011年、19–30頁。
- 西谷 茉莉子「イエイツと『聴衆』 —“Three Songs to the Same Tune”の改作についての考察」、『Albion』第64巻、2018年、16–28頁。